田舍教師

田舍教師

田山花袋著

吉之良圭房發行

（田舍教師）

明治四十二年十月十六日印刷
明治四十二年十月二十日發行

著作者　田山花袋

發行者　東京市神田區富山町十八番地　關字三郎

發行所　東京市神田區富山町十八番地　左久良書房

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

一冊金一圓六十錢
送料金十八錢

名著複刻全集 近代文学館 昭和43年9月

田舍教師

一

四里の道は長かつた。其間に青縞の市の立つ羽生の町があつた。田圃にはげんげが咲き、豪家の垣からは八重櫻が散りこぼれた。赤い蹴出を出した田舍の姐さんがをり〳〵通つた。

羽生からは車に乘つた。母親が徹夜して縫つて呉れた木綿の三紋の羽織に新調のメリンスの兵兒帶、車夫は色の褪

せた毛布を袴の上にかけて、梶棒を上げた。何となく胸が躍つた。

清三の前には、新しい生活がひろげられて居た。何んな生活でも新しい生活には意味があり希望があるやうに思はれる。五年間の中學校生活、行田から熊谷まで三里の路を朝早く小倉服着て通つたこともう過去になつた。卒業式、卒業の祝宴、初めて席に侍る藝妓なるものの嬌態にも接すれば、平生難かしい顏をして居る教員が銅鑼聲を張上げて調子外れの唄をうたつたのをも聞いた。一月二月と經つ中に、學校の窓から覗いた人生と實際の人生とは何處となく違つて居るやうな氣が段々して來た。第一に、父母からして既にさうである。それに周圍の人々の自分に對する言葉の中にもそれが見える。常に往來して居る友人の群の空氣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もそれぞれに變つた。

ふと思ひ出した。

十日ほど前、親友の加藤郁治と熊谷から歩いて歸つて來る途中で、文學のことやら將來のことやら戀のことやらを話した。二人は一少女に對するある友人の關係に就いて先づ語つた。

『さうして見ると、先生中々御執心なんだねえ』

『御執心以上さ！』と郁治は笑つた。

『此間まではそんな樣子が少しも無かつたから、何でも無いと思つて居たのさ、現に此間も「大に悟つた」ッて言ふから、ラヴの爲めに一身上の希望を捨てゝはつまらないと思つて、それであきらめたのかと思つたら、正反對だッたんだね。』

『さうさ』

『不思議だねえ』

『此間、手紙を寄越して、「余も卿等の余のラヴの爲めに力を貸せしを謝す。余は初めて戀の物うきを知れり。しかして今は此ラヴの進み進まんを願へり、Physical なしに…」なんて言つて來たよ』

この Physical なしにといふ言葉は、清三に一種の刺戟を與へた。郁治も默つて歩いた。

郁治は突然

『僕には君、大秘密があるんだがね』

其調子が輕かつたので、

『僕にもあるさ！』

と清三が笑つて合せた。

調子抜けがして、二人はまた默つて歩いた。

少時して、

『君はあの「尾花」を知つてるね』

郁治はかう訊ねた。

『知つてるさ』

『君は先生にラヴが出來るかね』

『いや』と清三は笑つて、『ラヴは出來るか何うか知らんが、單に外形美として見てることは見てるさ』

『Aの方は？』

『そんな考はない』

郁治は躊躇しながら、『ぢや、Artは？』

清三の胸は少しく躍つた。『さうさね、機會が來れば何うなるかわからんけれど……今の處では、まだそんなことを

考へて居ないね』かう言ひかけて急にはしやいだ調子で、

『もし君がArtに行けば、……さうさな、僕は丁度小畑とMiss Nとに對する關係のやうな考で、君とArtに對するやうになると思ふね』

『ぢや僕は其方面に進むぞ』

郁治は一歩を進めた。

清三は今、車の上で其時のことを思ひ出した。心臟の鼓動の尋常でなかつたことをも思出した。そして其夜日記帳に、『かれ、幸多かれ、願はくば幸多かれ、オ、神よ、神よ、かの友の清きラヴ、美しき無邪氣なるラヴに願はくば幸多からしめよ、涙多き汝の手を以て願はくば幸多からしめよ、神よ、願ふ、親しき、友の爲めに願ふ』と書いて、机の上に打伏したことを思ひ出した。

それから十日ほど經つて、二人は其女の家を出て、士族屋敷のさびしい暗い夜道を通つた。其日は女は居なかつた。女は浦和に師範學校の入學試驗を受けに行つて居た。

『何んなことでも人の力を盡せば、出來ないとはないとは思ふけれど……僕は先天的にさういふ資格がないんだからねえ』

『そんなことはないさ』

『でもねえ……』

『弱いことを言ふもんぢやないよ』

『君のやうだと好いけれど……』

『僕が何うしたッていふんだ？』

『僕は君などゝ違つて、ラヴなどの出來る柄ぢやないからな。』

清三は郁治をいろ〳〵に慰めた。清三は友を憫みまた己を憫んだ。

色々な顔と事件とが眼に映つては消え映つては消えた。路には榛の疎らな並木やら、庚申塚やら、畠やら、百姓家やらが車の進むまゝに送り迎へた。馬車が一臺、後から來て、砂烟を立てゝ追越して行つた。

郁治の父親は郡視學であつた。郁治の妹が二人、雪子は十七、しげ子は十五であつた。清三が毎日のやうに遊びに行くと、雪子は常に莞爾として迎へた。繁子はまだほんの子供ではあるが、『少年世界』などをよく讀んで居た。

家が貧しく、到底東京に遊學などの出來ぬことが清三にも段々意識されて來たので、遊んで居ても仕方がないから、當分小學校にでも出た方が好いといふ話になつた。今度月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

給十一圓でいよ〳〵羽生在の彌勒の小學校に出ることになつたのは、全く郁治の父親の盡力の結果である。

路の傍に小さな門があつたと思ふと、井泉村役場といふ札が眼に留つた。清三は車を下りて門に入つた。

『頼む』

と聲を立てると、奥から小使らしい五十男が出て來た。

『助役さんは出て入らしやいますか』

『岸野さんかな』

と小使は眼をしよぼ〳〵させて反問した。

『あゝ、さうです』

小使は名刺と視學からの手紙とを受取つて引込んだが、やがて清三は應接室に導かれた。應接室と謂つても、卓や椅子があるではなく、からんとした普通の六疊で、粗末な

瀬戸火鉢が中央に置かれてあつた。

助役は肥つた脊の低い男で、縞の羽織を著て居た。視學からの手紙を見て、『さうですか、貴郎が林さんですか。加藤さんから此間其話がありました。紹介狀を一つ書いて上げませう』かう言つて、汚い硯箱を取寄せて、何か頻りに考へながら、長く默つて、一通の手紙を書いて、上に三田ヶ谷村村長石野榮造樣といふ宛名を書いた。

『それぢやこれを彌勒の役場に持つて入らつしやい。』

二

彌勒までは其處からまだ十町ほどある。

三田ケ谷村と謂つても、一ところに人家が固つて居る譯ではなかつた。其處に一軒、彼處に一軒、杉の森の陰に三四軒、野の畠の向ふに一軒といふ風で、町から來て見ると、何だがこれでも村といふ共同の生活をして居るのかと疑れた。けれど少し行くと、人家が兩側に並び出して、汚い理髮店、だるまでも居さうな料理屋、子供の集つた駄菓子屋などが眼に留つた。ふと見ると平家造の小學校が其の右に

あつて、門に三田ヶ谷村彌勒高等尋常小學校と書いた古びた札が懸つてゐる。授業中で、學童の誦讀の聲に交つて、をり〳〵教師の甲走た高い聲が聞える。埃に汚れた硝子窓には日が當つて、處々生徒の並んで居るさまや、黑板やテーブルや洋服姿などが微かに透して見える。出入の時に生徒で一杯になる下駄箱の邊も今はしんとして、廣場には白斑の犬がのそ〳〵と餌をあさつて居た。

オルガンの音が微かに講堂と覺しき邊から聞えて來る。

學校の門前を車は通り拔けた。其處に傘屋があつた。家中を油紙やしぶ皿や糸や道具などで散らかして、其中央に五十位の中爺がせつせと傘を張つて居た。家の周圍には油を布いた傘のまだ乾かないのが幾本となく干しつらねてある。清三は車を停めて、役場のあるところを此の中爺に訊

ねた。

役場は其街道に沿つた一固まりの人家の中にはなかつた。人家が盡きると、昔の城址でもあつたかと思はれるやうな土手と濠とがあつて、土手には笹や草が一面に繁り、濠には汚ない錆びた水が樫や椎の大木の影を帶びて、更に暗い寒い色をして居た。其濠に沿つて曲つて一町ほど行つた處が役場だと清三は敎へられた。かれは此處で車代を二十錢拂つて、車を捨てた。笹藪の傍に、茅葺の家が一軒、古びた大和障子に御料理そば切うどん小川屋と書いてあるのがふと眼に留つた。家の周圍は畑で、麥の靑い上には雲雀が好い聲で低く囀つて居た。

彌勒には小川屋といふ料理屋があつて、學校の敎員が宴會をしたり飲食に行つたりするといふことを兼ねて聞いて

居た。當分は其料理屋で賄もして呉れるし、夜具も貸して呉れるとも聞いた。其處にはお種といふ綺麗な評判な娘も居るといふ。清三は四邊に人が居なかつたのを幸はひ、通り懸りの足をとゞめて、低い垣から庭をのぞいて見た。庭には松が二三本、櫻の葉になつたのが一二本、障子の黑いのが殊に際立つて眼についた。

垣の隅には椿と珊瑚樹との厚い綠の葉が日を受けて居た。椿には花がまだ二つ三つ葉がくれに殘つて見える。

此邊の名物だといふ赤城おろしも、四月に入ると全く止んで、今は野も綠と黃と赤とで美しく彩られた。麥の畑を貫いた細い道は、向ふに見えるひよろ長い榛の並木に通じて、其間から役場らしい藁葺屋根が水彩畫のやうに見渡される。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com